Jack of all trades

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｊａｃｋ　ｏｆ　ａｌｌ　ｔｒａｄｅｓ

【Ｎコード】
Ｎ１１４９ＢＡ

【作者名】
音無　無音

【あらすじ】
「何でも屋」で名のしれている彰士とちあの二人組。　そんな二人にとある依頼が――！？　短編はコチラ【ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｓ５６３５ａ／】

case1　ストーカー（前書き）

編集めんどくせーかったです
やめまみた　噛みました　やめました

case1　ストーカー

るるる、と鳴り響く電話の音。出たのは長身の二十代に入ってそうな好青年。
彼は吸っていた煙草を口から外し、「もしもしぃー？」と酒に酔ったような（ていうか酔ってるんだけど）声を出す。
「……依頼だな、ああ、分かった、あ、いえ！分かりましたぁ～～☆」
上から目線な態度が一変する。声色が気持ち悪い。
「ちあ、出るぞ」
ちあ、というのは彼・彰士（しょうじ）のパートナーであり仕事仲間。
容姿こそまるで女の子だが彼は男。茶髪のロングストレートは地毛である。
こう見ていると、クールな彼氏に少し童顔な彼女という恋人同士にしか見えないだろう。
「お仕事なの？」
まあ、恋人同士に見えるときは、彼らの仕事を知らぬ間だけだろう。
「今回は護衛だ」
「ふーん、そう」
淡々と短くかつスピーディーに話をする二人。
「服は？」と、ちあ。
「あっちで手配してくれる」
「ＯＫ　じゃ、行こうか」
「車で行くが高級車はまずいよな」
「歩いて、で」
「……」

＊　＊

ぴん、ぽーん…、と。恨みも込めて彰士はインターホンを押す。
別段近いわけでもなくだが遠いとも言い難い…そんな微妙な距離を
「まだ時間がある」「ウォーキング」という理由で（逆らうと結果
が怖い）歩いてきたのだ。
当人はとても満足げだったので、怒る気もせずせめてもとインター
ホンに八つ当たりする情けない大人だった。
ドア…というより扉が開くのがすごく遅い。本当にしばらくして
バタバタと数人の足音。
「…玄関までが遠いんだね」
「俺たちの家もだいぶデカいけどなあ」
このうちの豪邸よりは遥かに小さいが。
「お、お待たせしました！何分、邸内で迷ってしまい…」
迷うほどの大きさである。玄関だけ見ても、一軒家一つ分…ぐら
いあった。無論比喩だが…比喩…にならないぐらい。
「…お邪魔します」
「ご案内申し上げます」
「問題ないです！二人で行けます！」
「はぁ！？何言ってんのお前！！」
「うっさい。お仕事多そうですしお休みなさっててーいーですよー」
ひらひら、と手を振る。メイドさん達は「では、お言葉に甘えて」
と言って本当に帰ってしまった。
「……おい、いーのかよ」
「大丈夫。護衛をするんだったら盗聴器（おみやげ）あげないとね」
「…ふん」

＊　＊

「おぉ！よく来てくださった！」
「遅れて申し訳ない。手土産をやろうか」

と、自分の手柄でもない盗聴器をどさどさどさどさと投げていく彰士。
目分量でも３０はあるだろう。
「…これ…は…」
「盗聴器だよ。この屋敷は広いからまだあると思うけど、僕、あ、いや“私たち”の取れる分だけ取って来たよ」
「…申し訳…ありません…」
ゆっくりと、この屋敷の主は謝った。
「謝罪なんかいらねーよ、内容をくれ」
「…わかりました」

case2　ストーカー？

「……と言う訳でございます」
「娘さんがねえ…」
「……はい。」
内容は、こうだった。

彼には一人娘がいて、とても綺麗で可愛くて優しくてピアノが上手くて成績優秀。
絵に描いたようなまさにお嬢様、だった。
彼女にも欠点があって…それは、「男嫌い」。年も１８。結婚も控えているのに「男嫌い」。
そして、ある日。彼女は嫌ながらも父のため、お見合いをした。
きちんと断ったのだが、その相手が相手で諦めきれず財力を駆使したストーカー行為を始めたのだ。
ここまで聞けばわかると思うが、彼ら二人の任務は
『ストーカー行為から彼女を守り、ストーカー行為を止めること』。

「…だけどなあ…」
「何か…？」
「俺ら男じゃん？」
「え？いや、でも、ちあ様は…」
「私は男だよ。女装好きかな」
「…、まあいいです。隣室に服をご用意してありますので」

「…えーっと、まず、お嬢様に会う…か」
「それは私がする？」

「ん、頼んだ」
護衛と言えば、やはりメイドや執事。ちあはメイド服で、彰士が執事。
そして、今はその“お嬢様”の自室前である。
ちあが、コンコンと二度ほどノックすると中からどうぞと声が返って来た。
「失礼します」
女装したちあが男嫌いの少女の部屋へ一人入っていった。
（…中で何があっても俺はお前を忘れな――）
「きゃぁぁあぁぁあ？かわいーっ」
「何ィーーーー！？」
あまりの驚きに、ドアを開けて入ってしまった。
「ぎゃあああぁぁあぁぁ？！」
「うわぁぁあぁぁぁ！？」

（・（ェ）・）間（、（ェ）、）

「…よ、寄らないで！！あ、あなたが新しい護衛ね…精々死なないことね！！！」
どんな捨て台詞。彼女は、この風間家の一人娘・菜苗（ななえ）。
「大丈夫ですよーぅ。私たちはお嬢様の身を守る者です。死にはしません」
「…だ、だって私の護衛で何人死んだと…」
「１１人です」
「え？」
「１１人。英語で言いましょうか？ｅｌｅｖｅｎですよ」
菜苗は、「わ、わかってるわよ！！」と驚きと自室に男がいるという状況に震えた声を混ぜ合わせ言う。
「…どうして…」
「何故知っているのか、なんて後回しです。さ、今日は学校に行く

日でしょう」
「…嫌よ、行きたくないわ」
「……無理強いはしませんよ。じゃ、私たちは出ていきますかね。行こ、彰士」
「ん？ああ、煙草吸いてぇしな」

彼女が学校に行かない理由。それは単純。
“みんなを傷つけたくないから”。
彼女にふりかかっている“不幸（ストーカー）”は、ただ個人情報を盗んだり、後ろについてきているだけじゃない。周りに近づくものをすべて抹殺し、消した。
だから、護衛が、死んだ。
彼女は、優しいんだ。
傷つくのは苦しむのは悲しいのは私一人でいい。そうやって、
「そうやって生きてきたんだろうなあのガキは」
「だろうね。」
護衛が、守るどころか守られる立場になっていた。皮肉な話である。
「さて、ちょっくら豪邸さんの外周を掃除するかね」
「僕もする」
と、ちあは黒い長い傘を取り出した。
ちあが元々小さいのもそうだが、その傘には６０センチでも５５センチでもましてや７０センチでもなかった。
１００センチ。１メートル傘。彼はこれを用いて――戦うのだ。

＊　＊

庭のストーカーたちが片付いたと同時に、菜苗の部屋から彼女のものらしき悲鳴。

きっと二人を外に追いやるように外周に雑魚を並べたのは、部屋を、菜苗を一人にするためだろう。
――今更気付いてなんだ、って話。
「――ッチ！！手が早すぎんじゃねーの！？」
「…どうせメイドとかにでも紛れてんでしょ」
菜苗の部屋に繋がるテラスの真下に来る。
「…鈍ってるから行けるかな」
「行けるんじゃねーよ。行くんだよ」
テラスとは逆方向にある大木に向かって走る二人。
それを器用に蹴り、跳躍する。　勢いあまり、ガラスをぶち破って入る。
「お嬢様ぁ？大丈夫――」
と、問う暇もない。目の前には、ナイフを突きつけられた主（ななえ）の姿。
「…ち…おい、離せよ」
「嫌だと、言えば？」
「殺（や）るしかねーな」

case3　ストーカー？

「殺(や)るしかねーな」
「おやおや、怖い」
と、回していた手とナイフを外す。
当の菜苗(ななえ)は肩で大きく息をしていた。相当、怖かったんだろう。
「…たーだーし」
「？」
「殺(や)るのは、俺じゃねーよ」
「な、しまっ――」
“もう一人を忘れていた”。
気配に気づいて振り返ったのは、もう遅い。
後ろには思い切り1メートル傘を振りかぶり、鬼のような形相で居る――ちあがいた。
あとは一瞬。　傘の“バキ”という音でなく、まるで鉛でも当たったような“ゴン”という鈍い音。
「「…女じゃねーのに触んなクズ」」
一字一句間違えず、二人は言った。

「…その、ありがとう…」
「いや、そーいう任務だし」
「はい。問題ないです！」
「……ちょっと、男の人見直しました」
ぽつりといった言葉は、ちあにしか届かなかった。

仲間を一人殺(うしなっ)された敵側は、数日間何の反応も見せなかった。
だからこそ、警戒が必要である。

気を抜かせつつ、奇襲。それは当然の策戦であり、作戦。
　あの日から、菜苗は学校に行くようになった。
きっと、二人の強さを認め安心したんだろう。いいことである。
そして当然のごとく女子校のため入校はちあだけが許された。
一人寂しく彰士（しょうじ）は外回りの護衛。
「しょーじー！！」
　と、玄関から駆けてくるのはちあ。
「お、おい、お前護衛……」
「…それどころじゃない！！…が、菜苗が消えた！！」
「……あぁ？」

　ちあの言うとおりでは、授業と授業の合間。つまり、休み時間に消えたのだ。
ちあが護衛を怠ったんじゃない。その護衛を上回るほどの――技術。
「…ち、今回は手強いぜ」
　ぴ、ぴ、と自分の携帯をいじる彰士。と、それを覗き込むちあ。
あらかじめ、発信機をつけておいたのだ。無論秘密だが。
「いた！――尋常じゃねえ速さだな…？って、あれ？俺らの…上？」
　と、上を向くと――

ばらばら、とヘリコプターが飛んでいた。

「っくそ！！ちあ！撃ち落とせるか！？」
「え、やだ。出来るけど、傘無駄になる」
「っくそ！！！」
　いろんな意味で怒りの混じった「くそ」を吐いた。

＊　＊

発信機に導かれ、たどり着いたのは廃工場。

まるで、二人をここで待っているようだった。否、誘っているんだろう。
「いいか、遅れたら蜂の巣だ。」
「いっせーの、で！、で走るんでしょ」
「ああ、いっせーの…で！」
二人が全く同じ速度で走り出すと、銃弾の雨。ちあはそれを“傘でなぎ払っていく”。
建物の中に入ると、ロープに縛られた菜苗と犯人、否、見合い相手がいた。
「お疲れ様、ボディーガードさん」
「なめてもらうと困るぜ」
「そうだよ。ボディーガードは“仕事内容”。私たちの仕事は」
「「何でも屋「Ｊａｃｋ　ｏｆ　ａｌｌ　ｔｒａｄｅｓ」さ」」

それだけ聞くと、見合い相手の血の気が引く。
「……は…ふ…ははははは！わ、笑わせてくれる！！嘘をつくな！！その組織はひ弱そうなガキと二十代の男だけじゃなかったはずだぞ！！」
流石に名前は知っているらしい。どれほど、有名で強いのかを。
「無理だよ」
「何がだ」
「ごめんね」
「だから…」
そこで、彼はハッとする。
“周りの気配がないことに”。“彼らに奇襲が銃弾が当たらないことに”。
「全部、倒しちゃったんだ」

case4　ストーカー？

「全部、倒しちゃったんだ」
「――――――！！！！！」
いつの間に？それは、ほんの少し前。銃弾の雨を、雨の中をくぐってきたとき。

“ちあは、傘で弾丸を全てなぎ払った”

つまり、つまるところ――
それは、跳ね返ったことになる。ということは――
「…は、跳ね返しつつ…当てたというのか？！」
「そう」
そして、見合い相手は、耳を澄ます。
「……嘘だ、嘘だ…それだけじゃない…全て、全て“急所を外してある”…だと…？！」
そう、“生きている”。当たったのは腕や太ももなど、死にはしない場所。
ちあは、弾丸の雨をよけつつ、更に相手を狙いだが殺さず。
そして自分より背が遥かに高い彰士に合わせ走る。
この行為を全てやってのけたのだ。
「…ひ、ひぃ！！！わ、わたしは一体誰を…倒そうと…」
自分の愚かさ、弱さに気付く。
「そう、そして更に。こんなちっこいちあでも“この程度のこと”ができる。
っつーことは、単純に？」
「あ…こ、殺さない…で…な、なんでもする！金か！？金だな！？」
ぐぐ、と強く強く拳を握る。

「俺はもっと強いってことだよ！！！」

渾身の一発。
殴られた本人はもっと痛いが、聞いている“音”だけでもだいぶ大きく、
工場が響く構造だからと言っても、その殴った音は、鼓膜を破るかとも思わせた。
「俺たちに挑むんじゃ、１００年あっても足りねーよ、クズ」
こうして、タラシなもやし相手をした最強の仕事は終わった。

＊　＊

後日、その事実を知った彼の両親は、物凄く腫れた頬を携えた本人を連れ謝罪に来た。
これで、彼ら何でも屋の仕事は、終わり。
報酬（相手もくれたので二倍）をしっかりもらって、帰るところだった。
「ま、待って！！」
と、二人を呼び止めたのは意外な人物。　――菜苗だった。
「ひゅぅ」と、ちあ。
「…？何だよ。もう仕事は終わったぜ」
「ううん、…それについては、ありがとう。新しく一歩踏み出せるわ」
にっこり、笑った。本当の彼女。
不安も何もない。檻から飛び出せた自由な笑顔。
その笑顔を見て二人は安心した。
「彰士さん、ちょっと耳貸して」
「？」

言われた通りに耳を貸すため腰を下げると――

「…は…」

頬に軽くキスをされた。

「……立派な女になって、貴方のもとへもう一度向かいますから」

「ちょ、あ、え…？」

「やるじゃん。見直したぜ、しょーじさんっ？」

「…るせえ！！」

まるで表情を隠す様に、煙草を吸う。

それを見て、ちあが不適に笑む。

「…きっと、菜苗ちゃんが好きになったのは他でも無い彰士の優しさ、だよね」

彼に聞こえそうで聞こえない声。

そんな微妙な声で、そう言い早歩きの彼を追った。

ｃａｓｅ５　女子校と脅迫

「これだけありゃしばらくは過ごせるな」
と、貰った大金をニヤニヤ眺める彰士。
満足そうにコーヒーを飲んだ。
「ねーっ！見て見て！！」
「あぁ？……って、ブーーー！？」
目の前にいたのは女子の制服を着たちあ。だがそれは別に変ではない。
「おま、それ…女子校のじゃん！！」
「うん！なっかなか手に入らなくってねんっ」
くるり、と回ってみせた。
スカートを物凄く短く折ってあるので風で下着が見えそうだ。
「おい、回るな。
てゆーかいくら可愛らしい容姿でもな…お前…２０超えてんだぞ
２０超えの男には欲情しねーよ…」
「うるせぇ。殺すよ？」
「低い声で言うな！！」
「まあ、それはそうとお客さんだよ」
「先に言え」

客室で待っていたのは、高校生くらいだろうか。美人な子だった。
「はいはい。どういったご用件で」
「あ、あの…私…の、先生についてなんですけど…」
「先生？」
「は、はい。私女子校に通ってるんですが…最近来たばかりの先生に…その、脅されてて…」
「脅される？あ、はいコーヒーだよーっ？」
和む、というか空気を読まないちあである。

「あ、ありがあとうございます…。実は、その女子校では男女交際が禁止されているんです」
「プライベートまでかよ」
と、コーヒーをすする。
ちあは、コーヒーをすすっている彰士の隣へ座った。
「でも、それを守ってる人なんて一年生とごく一部…。私も、付き合っている人がいるんです」
「へぇー」
「……それが、その先生にバレて…」
「わお」
「バラして欲しくなければ…って」
「で、その脅迫の内容は」
と、彰士が問うと黙り込んで俯いてしまった。
そんな彼の足をちあは思いっきりかかとで踏む。
そしてなにごともなかったように、笑顔で
「無理しなくていいよ。落ち着いてからでいいの」
と言う。
「てんめぇえぇぇ！！いてーし！おい！無視すんな！」
「うるっさいなぁ。菜苗ちゃんのこと新聞にチクるぞ」
「すいませんでした」

「あの」

「「！」」
「お話…続けていいですか」
「構わねーよ」「いいよーっ」

「…きょ、脅迫の内容は……その先生に言われた人物を病院送りにすること…です…」

「…ひど」
「ありえねー」
「…嫌なんです！本当に…でも、でも！次傷つける相手が…私の…親友で…」
「そりゃいかんな……」
「どうか…どうか…」
崩れるように泣き始める彼女。
「…おい、ちあ…」
「はい？」
「お前…この高校の服って…」
「あぁ！さっき見せた可愛いヤツでぇ～～…って、ハッ！」
悟るちあ。
「ガンバレ☆」
「うえぇえぇえぇえぇ…」
こうして、ちあの女子高偵察が始まった。

「あのぉ、その女子校って茶髪ロン毛ありですかぁ」
脱力気味に聞くちあ。
「髪の毛は自由です」
「うおっし。カールかけちゃお」
女子力（笑）が発揮できる無駄なチャンスである。

case6　女子校と脅迫？

翌日。
「こんにちはぁ～☆転校生の乾（いぬい）　ちあでーっす！」
……。
教室に走る沈黙。
「あれ？こーゆーのってやっぱうけない？」
頬に人差し指をつき舌を出して言う。
「つまんなーい。せんせっ　席教えて」
「え、ああ、一番後ろの窓際です」
「ありがとーございますっ」

「ね、ねえ、なにあの子…」「さあ？」「どこから来たのかも秘密らしいよ」
評判、最悪である。
だがそれでいいのだ。評判がよく、友達でも作ってしまえば行動しにくい。
単独行動で手っ取り早いのは、嫌われること。
「ねえ」
誰かのその一言で、教室が静まった。
ちあが横目で入口を見ると、Sっぽそうなメガネ先生が立っていた。
（あれかぁ）
一目で確信した。きっと、あの女が“犯人”と。
「このクラスに来た転校生…呼んでくださる？」
皆が呼ばず、目で教える。だが先生は、気付いているのだが気付かぬフリ。
「あっ　はぁーい！私でーす！」
と、自らでその修羅場に躍り出る。

「ちょっといらっしゃい」
「ふあーい」

「あなた…男性と交際してるでしょ」
「してませーん☆」
「…嘘おっしゃい」
（いや、つーか、僕男だし）
「してないです☆」
「…騙されないわよ」
（嘘だろ…こいつアホじゃねーの）
反面キレつつ、続けて同じ言葉を繰り返す。
「し　て　ま　せ　ん」
一語一語強く言う。
「呆れたわ…そこまで嘘を通すのね」
（なんだこいつ……まさか）
「せんせー、それ片っ端から言ってるんですかー？」
「は！？」
図星。　っていう顔をする。
というか、顔に書いてあるってこんな感じなんだってチアは思った。
「いやー、なんでもないでーす。でもでもっ　私付き合ってる人いませんっ」
ウルウルと瞳を潤わせて、拳をほほに持って行きぶってるポーズ。
それに軽く引いてメガネを抑える。
「…ふん、信じてたまるもんですか」
ちあの笑顔も、そこで切れた。

ｃａｓｅ７　女子校と脅迫？

ブチン、という効果音が出るぐらい、ちあはキレた。
彼の沸点は低くはないものの、あれほど信じてもらえずにいれば誰でもきれるだろう。（多分）
「ふざけんじゃねーよ…」
低く小さく言う。
「おまっ　信じてねーしかいえねーの？つーか！生徒信じてねーの！？」
「なっ　何様よ！その口の利き方は！」
「るせーよ！証拠上がってんだ！！警察もオモテ来てんだぞクソババア！！！！」
「んまっ……」

「年齢詐欺した挙句結婚詐欺！
生徒は全く信じねーし、しかもその生徒の弱みを握って物事押し付ける！！
ふざけたババアだぜ！てめーなんぞ…ブタ箱がお似合いだわ！くたばれブス！！」

「な……誰に物を言ってると思ってるの！」
「成り上がりの新人教師サマですがぁ？」
「…まっ…ふ、ふざけるのも大概にしな……」
と、そこで彼女の口は止まった。
「あ？んだよ、続き言えよクソバ――」
「乾君、続きは私が」
「うおっ」
声を聞いて後ろを向くと――いたのは…
「あ…天根さんじゃないですかぁ～～☆お久しぶりっ」

いつもの声に戻して、言う。
天根（あまね）　総二郎（そうじろう）。
数多の事件を解決してきた有名刑事だ。一般人でも知っている…ほど。
「あ、天根さんですって？…そんな刑事様が私に何のようで…」
「君に少し…いや…大分悪いコトが絡んでてね。署までご同行願うよ」
「う、嘘よ嘘嘘嘘！！！私がやってきたのは正しい行い――」
パン、と。　乾いた音が響く。
「正しかったら、人は傷つかねーよ」
「……さ、行こうか」
「……嘘嘘嘘嘘嘘嘘ありえない…」
天根刑事の部下に連れられ、車へと歩いて行った。

「乾君」
「何ですかぁ」
「……あれは、昔の自分を移してた本心だろう」
「…嫌いですよ、そーゆーの。過去（むかし）とか、掘り起こさないでくださいよ」
「悪かった…、外で須野君が待ってたよ」
「はぁーい」

extra　昔話

『さ、ちあちゃん。お次はヴァイオリンの練習よ』

ちあは、小さい頃両親を亡くしてからずっと叔母と住んでいた。
その叔母は所謂“完璧主義(スパルタして)”で、息子にも娘にも嫁にも何もかも完璧にこなすように仕込んできた。
そのせいで彼女の周りの人間は次々と彼女の元を離れ、しまいには死ぬ人まで出た。

だが叔母はそんなことなど気にせず彼にも仕込(スパルタ)みを行おうとした。

最初はちあも、構わないと思っていた。
いい成績も出せたし、能力がつく。

だけど高校生のある日。
「これじゃだめじゃない！！どうして、この成績なの？」
成績は、悪くなんてない。むしろ、良いぐらいだった。
「ダメだよ、ダメダメダメダメダメ…“良”じゃダメなの…“優秀”じゃないと…いいえ、それ以上よ…」
ちあは、思った。
この人の“完璧(これ)主義”は病気だと。
「あなたは、私の養子なのよ…完璧完全じゃないといけないの…」
彼女がこう言えば、
音楽だろうと、スポーツだろうと、勉強だろうと、なんだろうと。
全て血が出るまでやらされた。
市内で一位は許されず、県内で一位も許されず、地区で一位さえ許されず、地方で一位だって許されず、

全国で一位だからって許されない。
汗じゃなく血を流して出した世界の結果だって、ぐちゃぐちゃにされてゴミ箱へ。

彼女のせいで　僕が狂う
彼女がいると　僕が壊れる

今まで習った習い事。きっと、１００は超えてるだろう。
今まで取った賞状やトロフィー、優勝。　いくつだったかなんて、忘れた。

どんなにそーやって頑張っても。
ヴァイオリンを持てないぐらい頑張っても、ピアノが弾けないぐらい頑張っても、
竹刀が持てないぐらい努力しても、道着を着れないぐらい努力しても、
鉛筆がシャーペンが持てないぐらい勉強しても、これ以上頭にはいらないぐらい勉強しても、
バットがボールが握れないぐらい野球しても、ボールを蹴れないぐらいサッカーをしても
どれだけ頑張っても、彼女は満足しない。

努力して、最高の結果を出したら。努力して、ボロボロになったら。
『じゃ、次はフルートね』　『じゃ、次はギターね』
『じゃ、次はアーチェリーかしら』　『じゃ、次は合気道かしら』
『じゃ、次は…』

「もうやめてくれ！！！！」

「あ…え、ごめん」
「え…？」
“いつもの声”に気付いて見渡す。　いつもの、“家”の景色だ。
「夢……」
「ごめん…うなされてたからさ…」
「いや…いいの」
と、頭を抑えた。
グラグラする。　痛い。　忘れたはずの記憶が、彼のトラウマが一気に蘇るという、夢から醒めたのに悪夢。
「……くそ」
「…なあ、話してくれよ」
「あ…？」
「…寝言、微妙に聞こえたし」
「…っは…ついてねーな、僕」

彼は、全てを吐き出した。

ｃａｓｅ８　アイドル事情

＊　＊

「……そんなことが…」
「…うん」
（つーか、よく考えりゃおかしーじゃん。家事もできるし裁縫もなんだって…
ちいせえくせに無駄に強いし、知識あるし…。
そーいや、海外行った時も何不便なく過ごした気がする…。まあ、俺自身も数カ国語は余裕だけど…）

《こいつは、そーゆーレベルとかじゃ成り立たないんだ。》

そう彼に思わせた。

＊　＊

ルルルル、と電話が鳴った。　取ったのはちあ。
「はーい、もしもしっ」
『あ…あの…Ｊａｃｋ　ｏｆ　ａｌｌ　ｔｒａｄｅｓ…さんですか？』
「え？はいっ　そーです」
（あれ？この声…すっごい聞いたこと…）
『あの、私…実は』
「あーっ！ＡＢＣ４８の前野（まえの）あやこ！」
『…ご、ご存知で…』
「それで、ご用件はー？」
『は、はい…私たちのボディーガードと…』

「と言う訳で引き受けたのが、ボディーガード？」
「そ」
ＡＢＣ４８とは、今人気絶頂中のアイドルグループだ。
電話をかけてきたのは今回の新曲でセンターに決まった前野あやこ。
人気になるのはいいのだが、留守電や無駄に多い花束…などなどのストーカー被害が増えつつもある。
更に。ニュースにはしなかったため、公にはならなかったが…今回の依頼者前野の私物が盗まれる事件が起きたのだ。
これではまずい、と彼女はＪａｃｋ　ｏｆ　ａｌｌ　ｔｒａｄｅｓに連絡したのだ。
「ま、本物に会えるいいチャンスじゃね」
「だよねーっ」
「で、その服何」
「ＡＢＣコス」
おなじみチェックが目立つ制服仕様のコスチュームである。
そして、自作。

「あ、今回ボディーガードしてくださる方ですか？」
と、駆け寄ってきたのは板橋（いたばし）　友（とも）だ。
「私も悩んでたんです…よろしくお願いしますね！」
「おう」「はぁーい」

今回はクイズバラエティー番組での撮影。　場所は室内プールだ。
不正解した人は真下の板が開きプールへドボン、という仕組みらしい。
「暇だねー」
「ああ、ここも貸し切りだしどーせ誰もこねーだろ」

「意外とあれじゃない？関係者とか」
「あるなぁー」
二人はそうほのぼのしていると、女性の悲鳴が聞こえた。
「ちあ！」
「分かってる――！！」
声のする方へ、二人は駆け出した。

case8　アイドル事情（後書き）

てゆーか、ストーカー大杉ワロス

case9　アイドル事情？

声がする方に居たのは――スタッフだった。
「……は？」
「「は？」はこっちだよ、ボディーガードさん」
「…へえ、邪魔する気」
「――ちあ、お前…即効で戻ってＡＢＣ（あいつら）守れ」
「あいあいさー」
言われた通りにちあが駆け出すと――
「行かせねーよ！」
と、スタッフが飛びついた。
「！？」
だが飛びついたのはちあが来ていた服で、ちあは既にこの場には居なかった。
「お前…スタッフに変装した…何だ？」
「それは営業秘密ってもんさ」
「そいじゃま、言ってもらうしかねーな」

＊　＊

ちあがセットの場所に着いた頃には、スタッフの服を着てナイフを持った男数人がＡＢＣを包囲していた。
「てめぇーら何してんだ！！！」
挑発気味に言う。　こちらを向いてくれれば吉。
「…あ？嬢ちゃんこそ――っがは！？」
結果、吉。

向いてくれるまでの一瞬で距離を縮め、その男を蹴り倒す。　顔面を蹴り上げそのまま空中へ。
　相手はあらかじめ持っていたであろう拳銃を空中のちあに向け、撃つ。
無論そんなもの持っていた1メートル傘でなぎ払い、相手の腕に当てる。
それを全て空中で行なった。
　敵が全て倒れたところで、着地。　ＡＢＣの皆の方へ向き
「大丈夫ですかあ？」
と問う。　泣いていたり震えていたりしていたが、まあ生きていたので問題はない。
人数もしっかり揃っている。
「…ふぅ」

　数分後。
警察と救急車がやってきた。　警察は、武装をしてきたのだがこの有様。
「…これは…誰が？」
「はいはーい　僕たちでーす」
　小学生ばりに挙手をするちあ。
「あ、ああ、乾さんに須野さんでしたか…」
「ご無沙汰してまーす☆」
「…あの…須野さんは？」
「…んえ？」
　言われてみれば、居ない。　この数分間会っていない。
「まぢですか…」
　ちあの顔が青くなる。　さっき残してきた場所に戻ろうとしたとき。

「乾さん！！後ろっっ」

という警官の声に振り向くと――彰士と残してきたはずの変装男がそこに…拳銃を構えて立っていた。

「…手、上げなよ」

言われた通りにゆっくり手を上げた。

「安心しな。お前の相方くんはお部屋で寝てる」

死んではいない、と安心して今の状況を再び考えた。

相手の真横にはＡＢＣ。　真後ろには…警官。こちらも銃を構えている。

この間合いならちあでも飛び出して余裕すぎるほど間に合うだろう。

だが、それは確実に誰かが死ぬ。　特に真横にいるＡＢＣだ。

（――どうする…僕！）

「動け！ちあ！！」

上から不意に彰士の声がした。

その通りにちあは、犯人の懐へ入る。　それに動揺し犯人はＡＢＣへ銃を向けた――のだが。

「い…いない！？」

真横にはＡＢＣは居なかった。

「よそ見したね」

「！」

視線を戻したがもう遅かった。　ドゴ、と響く痛い音。

ちあの渾身の蹴りがヒットしたのだ。

case10　アイドル事情？

「よう、よくやったな」
「まさか、あのときプールの上にＡＢＣを逃がしてたなんてね」
「おう」

「あの」

話しかけてきたのは依頼人の前野だった。
「？」
「まだ、終わってないんです」
「は？」
「また…楽屋に花が…大量の花が届いて…」
「はあ？」
二人は顔を見合わせた。
「その花にメンバーの名前は？」
「ありました。私と板橋　友と…篠原　里子と、渡　まゆの四人です」
「四人かあ…護衛きつそう」
「予定は？」
「かぶることが少ないです…」
「そうか…」
「これ、僕と彰士のメアドだよ。なにかあったらのために」
「あ、ありがとうございます」
今日の撮影はもうないそうだったので、二人は家に帰ることにした。

case11　心境

「……」
ちあは、キッチンで料理をしていた。
「……」
「って、おい、ちあ！！臭いと思ったらお前！！！」
「……え、あ、うわああ！？」
麺を茹でていたのを放置していたためお湯がぶくぶくとこぼれていた。
「飯作ってるときぼーっとすんなよ…」
「ご、ごめん」
ふたりして片付ける羽目になった。

結局。
二人は近所のコンビニで弁当を買って食べることになってしまった。

「どうしたんだよ、最近…って、おい舐りバシはやめろ」
「…え、あ…うん…」
「答えろよ（笑）」
「……」
（無視された…）
いつもなら「ごめんねっ　さっきはっ」とか言って笑ってるのに。
彰士の心には小さなわかだまりができた。

そんな時。
彼らの家の前に二つの影。その影があの忌々しい記憶を呼び覚ますことなど、誰も知らない。

case11　心境（後書き）

短すぎた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1149ba/

Jack of all trades

2012年1月10日16時52分発行